

日本語版 BIS-11作成の試み

小 橋 眞理子^{*1}・井 田 政 則^{*2}

An Attempt to Make the Japanese Version Barratt Impulsiveness Scale, 11th version (BIS-11)

KOBASHI Mariko and IDA Masanori

Abstract

BIS -11 (Barratt Impulsiveness Scale); the standard impulsivity scale widely used in the world, is still not used in Japan. In this study, we aimed to make the Japanese version of the BIS-11. Our research is based on the translated version of the original BIS-11. Five factors were extracted as a result of the factor analysis. High reliability was found among these factors; “the lack of careful plan/thought”, “motor impulsiveness”, and “the lack of attention/concentration”. In order to check the construct validity, the correlation of these three factors with two of the factors that are opposite to the impulsivity; the self-control and the consideration of future consequences were examined. We found the correlation between each of the three factors, and the “reformatory self-control” and the “consideration of future consequences”. Based on the above analysis of the reliability and the validity, we suggest that the Japanese version of BIS-11 can be used as a measure of impulsivity.

[Keywords] BIS -11, impulsiveness, self-control, consideration of future consequences

問題

衝動性は、さまざまな異常行動の背景にある中間表現系としての側面と捉えられ、精神疾患・病態における多くの研究がなされてきた。すなわち、衝動制御の障害が社会的な問題行動をもたらし、その対応の困難さのため、衝動性の視点からの病態解明の取り組みが求められてきた。衝動性に関しては、これまで多くの研究がなされてきたが、衝動性をどのように定義し、測定するかについてさまざまな観点があり、衝動性は明白に定義されてはいない。

衝動性は、単次元の概念ではなく、計画性のなさ・危険を冒す傾向・素早い決断 (Eysenck & Eysenck, 1977)、不注意による未熟な反応・反応抑制の失敗 (Baker, Lozano, & Raine, 2009)、即時小報酬への選好 (Ainslie, 1975) などをも含む多次元な概念とされる。このような多次元の概念である衝動性を、Barratt (1959) は、精神疾患というよりも一般の人々の中にみられる一つの人格特性として位置付け、Barratt Impulsiveness Scale (以後 BIS と表記) を作成した。Barratt は、Taylor の顕在性不安尺度 (Taylor, 1953) が示す不安と、BIS が示す衝動性との関連性を明らかにしたが、BIS の構成概念妥当性については、今後の研究課題とした。

その後 Barratt は、BIS の衝動性と Eysenck の外向性尺度 (Eysenck & Eysenck, 1985) との、あるいは Zuckerman の刺激希求尺度 (Zuckerman, 1979) との関連を調べ、BIS の改訂を行い、BIS-10を作成した (Barratt, 1985)。因子分析の結果 BIS-10は、3 因子構造であることが明らかになった。その3因子は次の通りである；1) 運動衝動性 (motor impulsiveness)：考えることなく行動する、2) 認知的衝動性 (cognitive impulsiveness)：早い認知的決断、3) 非計画的衝動性 (non-planning impulsiveness)：先見性の欠如。

BIS-10に関してその後、いくつかの分析がなされ (Luengo, Carrillo-de-la-Peña, & Otero, 1991)、BIS-10の示す認

* 1 立正大学大学院心理学研究科応用心理学専攻修士課程

* 2 立正大学心理学部教授

知的衝動性因子の定義に問題のあることが指摘された (Patton, Stanford, & Barratt, 1995)。このことを踏まえ、項目内容の検討が行われ BIS-11へと改訂された (Patton et al., 1995)。BIS-11においては、因子分析の結果、第1因子は「注意」(課題への集中のなさ)、第2因子は「運動」(とっさに行動する)、第3因子は「自己制御」(慎重な計画と思考)、第4因子は「認知の複雑さ」(精神的課題への挑戦を楽しむ)、第5因子は「粘り強さ」(一貫したライフスタイル)、第6因子は「認知の不安定」(思考の挿入・早い思考)の6因子構造となった。Patton et al. (1995)は、更にこれらの6因子について2次因子分析を実施し、その結果2因子ずつが組み合わさり、2次的には3因子構造であることが確認された。それらは、1) 注意衝動性 (注意・認知の不安定)、2) 運動衝動性 (運動・粘り強さ)、3) 非計画的衝動性 (自己制御・認知の複雑さ)であった。Patton et al. (1995)は、このBIS-11を学生・精神疾患患者・男性受刑者を対象に実施し、そのスコアの比較により臨床的有用性を示した。Moeller, Barratt, Dougherty, Schmitz, & Swann (2001)は、BIS-11がその人の衝動性と不適応行動との関連が測定できる有用な尺度であるとしている。

また、Moeller et al. (2001)は、衝動性を「内的あるいは外的な刺激に対して、拙速で無計画な反応を、自分や他人によくない結果を招く可能性を考慮せずに行う特性」と定義している。本研究では、これを衝動性の定義とする。

BIS-11は世界で広く使われているものの (e.g., Von Diemen, Bassani, Fuchs, Szobot, & Pechansky, 2008; Smith, Waterman, & Ward, 2006)、日本においてはほとんど研究がなされていない。Someya, Sakado, Seki, Kojima, Reist, Tang, & Takahashi (2001)が、BIS-11の日本語版の開発を行い信頼性・妥当性に関する研究を英文で発表しているが、日本語に翻訳された尺度化された BIS-11はいまだに公開されていない。Someya et al. (2001)では、BIS-11日本語版の開発にあたって探索的因子分析により、Patton et al. (1995)の提示した注意衝動性、運動衝動性、非計画的衝動性の因子的妥当性の確認はしているが、その各因子の信頼性係数をみると.60~.65 (係数)という低い結果となっている。その原因に関して、いくつかの項目に問題があることを指摘しているが、その検討はなされておらず、また、構成概念妥当性についての検討もしていない。

そこで本研究では、BIS-11の日本語版尺度の作成を試み、かつ信頼性と妥当性の検討を行う。まず、BIS-11原版の各質問項目を外国人専門家と共に翻訳した。このBIS-11を用い、因子分析を実施して改めて因子抽出を行い、その上で各因子の信頼性を検討する。さらに、構成概念妥当性を確認するために、衝動性とは逆の概念として捉えられるセルフ・コントロールおよび未来結果熟慮との関連を検討する。Ainslie (1975)によれば、セルフ・コントロールとは、目先の小さな報酬よりも将来の大きな報酬を選択することであり、衝動性とは、目先の小さな報酬を選択することとされており、このことからセルフ・コントロールと衝動性は負の相関を示すことが予想される。また、Moeller et al. (2001)によれば、衝動性とは、拙速で無計画な反応を、結果を考慮せずに行うこととされている。このことから、将来を見通し考慮する未来結果熟慮に関しても衝動性は負の相関を示すことが予想される。

本研究では、セルフ・コントロールの測定にあたり、杉若 (1995)が開発した尺度である Redressive-Reformative Self-Control Scale (以下、RRS と表記)を使用する。この尺度は、Rosenbaum (1980)が、セルフ・コントロールにおける行動の調整や維持などの個人差を評価する尺度として開発した Self-Control Schedule をもとに作成された。RRSは、1) 改良型セルフ・コントロール (将来の結果を予測して満足遅延することで、より価値ある結果に近づこうとするために実行されるもの)、2) 調整型セルフ・コントロール (ストレッサーによって妨害された機能の回復を求めて、現時点でのダメージ除去のために実行されるもの)、3) 外的要因による行動のコントロール (他者依存・自発的行動に対する消極性)の3因子構造となっており、その信頼性と妥当性が確認されている。このRRSのそれぞれの因子内容により、3因子のうち「改良型セルフ・コントロール」のみが、衝動性とは逆の概念としてとらえることができる。このことから、「改良型セルフ・コントロール」と衝動性が負の相関を示すと考えられる。

また、未来結果熟慮の測定にあたり、井上・有光 (2008)が作成した日本語版 Consideration of future consequences (以下、CFC と表記)尺度を使用する。CFC 尺度は、今現在の行動が未来の結果にどのような影響を及ぼすかを熟慮し将来の結果によって個人が影響を受ける傾向、すなわち、自分の望む未来の結果に達するためには、今、何を必要があるのかを考える程度を測定するために開発されたもの (Strathman, Gleicher, Boninger, & Edward, 1994)であり、その信頼性と妥当性が確認されている。この日本語版 CFC 尺度は、「未来結果熟慮」の1因子構造となっている。

目的

BIS-11の日本語版尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討することを目的とする。

方法

対象者

都内私立大学に在籍する学部生353名（男性142名、女性211名）、平均年齢は、19.9歳、標準偏差は3.15であった。このうち回答が有効であった305名（男性117名、女性188名：有効回答率86.4%）を分析対象とした。平均年齢は、19.8歳、標準偏差は3.0であった。

調査用紙

以下の3尺度を用いた。

1) 日本語版 BIS-11

BIS-11は、34項目からなる BIS-10 (Barrat, 1985) を、Patton et al. (1995) が改訂し、30項目の質問紙として作成した尺度である。その、BIS-11を原版にし、心理学専門家と日本語に堪能な心理学研究を行っている米国人と協議の上、翻訳を行い、日本語版 BIS-11の質問項目を作成した。これら質問項目に対して“全くあてはまらない”から“非常によくあてはまる”までの4件法で回答を求めた。

2) RRS

RRS (杉若, 1995) は、全20項目で構成され、改良型セルフ・コントロール、調整型セルフ・コントロール、外的要因による行動のコントロールの3因子構造となっている。本研究では、RRS20項目を使用し、杉若の調査と同様に“全くあてはまらない”から“まさにあてはまる”までの6件法で回答を求めた。

3) 日本語版 CFC 尺度

日本語版 CFC 尺度は、12項目からなる尺度であるが、井上・有光 (2008) では、そのうちの9項目での信頼性が確認されているため、本研究でもその9項目を使用した。また、井上・有光の研究では“かなりあてはまらない”から“全くあてはまる”までの5件法で実施されていたが、本研究では、回答者の混乱をさけるため、日本語版 BIS-11に合わせて“全くあてはまらない”から“非常によくあてはまる”までの4件法で実施した。

調査期間

2009年6月から7月。

調査手続き

集団法による調査を実施した。質問用紙は無記名自己記入式であり、大学の授業時間内に、協力を依頼した上で配布し、調査対象者の回答後ただちに回収した。なお、回答前に研究の趣旨を説明し、調査への参加は自由であること、個人のプライバシーは保護されることを口頭およびフェイスシートにて教示した。

結果

1) 日本語版 BIS-11の因子分析

日本語版 BIS-11の30項目のうち、項目11「私は、稼いだ以上に、お金を使ったりクレジットを使って支払う」・項目24「私は、住まいを変える」・項目25「私は、仕事を変える」にフロアー効果が見られたため、この3項目を除き探索的因子分析を実施した。Patton et al. (1995) の分析では、6因子構造が見られたため、同様に主因子法プロマックス回転で因子数を6に指定して分析を実施した。この際、項目22「私は、将来よりも現在に関心がある」と、項目30「私は、趣味を変える」は、共通性が低かった（共通性：項目22 = .065、項目30 = .103）ため、この2項目を更に除き25項目で再度主因子法プロマックス回転での分析を実施した。このとき、第6因子は項目12「私は、のんきである」のみであった。

第6因子が項目12の1項目のみの構成であったことから、因子数を5に指定し、主因子法プロマックス回転で因子分析を実施した。共通性の低い項目は、項目12・項目21「私は、定期的に貯金をする」・項目22・項目30（共通性：項目12 = .139、項目21 = .140、項目22 = .043、項目30 = .092）であった。さらにこの4項目を除いた23項目で主因子法プロマックス回転、因子数を5に指定し再度分析を実施した。その結果、解釈可能な5因子を抽出できた。その因子分析表をTable 1に示す。逆転項目はそれぞれ質問項目の横に*で示した。

第1因子は、項目14「私は、仕事の計画を入念に立てる」・項目16「私は、前もって、十分に練った旅行計画を立てる」・項目17「私は、雇用の確保のために計画を立てる」・項目13「私は、じっくりと考える」・項目26「私は、未来志向である」・項目5「私は、一貫した考え方をする」の6項目の逆転項目からなり、計画を立てることや、じっくりと考えることが困難であることを示しているため、「慎重な計画と思考の欠如」と命名した。

Table 1 日本語版 BIS-11の因子分析結果（主因子法・Promax 回転）

No	Item/Factor	I	II	III	IV	V
I 慎重な計画と思考の欠如						
14	私は、仕事の計画を入念に立てる *	.792	-.010	.068	.058	-.202
16	私は、前もって、十分に練った旅行計画を立てる *	.616	.022	-.001	.003	-.060
17	私は、雇用の確保のために計画を立てる *	.616	.037	-.069	-.065	.002
13	私は、じっくりと考える *	.475	-.018	-.028	.263	.035
26	私は、未来志向である *	.406	.001	-.034	-.216	-.045
5	私は、一貫した考え方をする *	.403	.057	-.103	-.306	.149
II 衝動的行動						
7	私は、突然の衝動にかられて行動する	.022	.995	-.012	-.097	-.050
6	私は、まったく『衝動的』に行動する	.034	.655	.093	.160	.009
8	私は、衝動的に買い物をする	.014	.575	-.066	.151	.049
III 注意・集中の欠如						
29	いろいろな考えが、私の頭の中を『駆け巡っている』	-.338	.040	.633	.012	-.189
28	私は、思考するとき、しばしば、本質とは無関係なことを考えている	-.070	.129	.495	-.035	-.159
1	私は、なにかに演じているときや講義などみなの前で話をするとき、『その場から逃げたくなる』ほど落ち着かない	.071	-.144	.477	-.315	-.052
27	私は、一度には、ひとつの問題しか考えられない	-.027	-.028	.469	.057	.187
23	私は、問題解決を考えていると、すぐにうんざりする	.105	-.085	.464	-.001	.021
4	私にとって、集中することは容易である *	.150	.091	.406	-.192	.272
15	私は、自制心がある *	.097	-.101	.398	.010	.076
2	私は、劇場や映画館で何かを鑑賞しているとき、あるいは、講義を受けているとき、じっとしていられない	-.047	.198	.367	-.160	.088
3	私は、『細部まで気を配る』ことがない	.255	.064	.339	.091	.046
IV 行動前の認知の欠如						
9	私は、すぐに決められる	-.118	.074	-.303	.622	.044
10	私は、何も考えずに物事を進める	.207	.093	.190	.539	.012
18	私は、何も考えずにとやかく言う	-.027	-.019	.302	.392	.069
V 認知の単純さ						
20	私は、パズルが好きだ *	-.268	.036	.018	.121	.701
19	私は、複雑な問題について考えるのが好きだ *	.118	-.057	.028	-.018	.588
因子間相関		I	1.000	.233	.476	.234
		II		1.000	.450	.514
		III			1.000	.289
		IV				1.000
		V				1.000

注) 逆転項目は*印で示した

第2因子は、項目7「私は、突然の衝動にかられて行動する」・項目6「私は、まったく『衝動的』に行動する」・項目8「私は、衝動的に買い物をする」の3項目からなり、衝動的に行動することを示しているため、「衝動的行動」とした。

第3因子は、項目29「いろいろな考えが、私の頭の中を『駆け巡っている』」・項目28「私は、思考するとき、しばしば、本質とは無関係なことを考えている」・項目1「私は、なにか演じているときや講義などみなの前で話をするとき、『その場から逃げたくなる』ほど落ち着かない」・項目27「私は、一度には、ひとつの問題しか考えられない」・項目23「私は、問題解決を考えていると、すぐにうんざりする」・項目2「私は、劇場や映画館で何かを鑑賞しているとき、あるいは、講義を受けているとき、じっとしていられない」・項目3「私は、『細部まで気を配る』ことがない」の7項目と、項目4「私にとって、集中することは容易である」・項目15「私は、自制心がある」の逆転項目2項目との合計9項目からなり、注意を向けていることや集中していることが困難なことを表しているため、「注意・集中の欠如」と命名した。

第4因子は、項目9「私は、すぐに決められる」・項目10「私は、何も考えずに物事を進める」・項目18「私は、何も考えずにとやかく言う」の3項目からなり、早い決断や、言動の前に何も考えないことを示すことから「行動前の認知の欠如」と決定した。

第5因子は、項目20「私は、パズルが好きだ」・項目19「私は、複雑な問題について考えるのが好きだ」の2項目の逆転項目からなり、複雑な問題に取り組むことが苦手なことを示すことから、「認知の単純さ」とした。

2) 各因子の基本統計量と信頼性の検討

因子分析で抽出された5因子の各項目の得点（逆転項目は、項目得点を逆転させたで計算）を合計し項目数で除したものを下位尺度得点とし、それぞれの基本統計量を Table 2 に示した。

また、各因子の Cronbach の係数を算出したところ、第1因子 = .69、第2因子 = .82、第3因子 = .70、第4因子 = .54、第5因子 = .58であり、第1因子・第2因子・第3因子の3因子において高い係数が得られた。

3) 妥当性の検討

RRS については、杉若（1995）の尺度構成に従い各下位尺度得点を算出し、その基本統計量を Table 3 に示した。各下位尺度の内的整合性を確認するため Cronbach の係数を算出したところ、「改良型セルフ・コントロール」が = .75、「調整型セルフ・コントロール」が = .78といずれも高い値を示し、信頼性が確認された。しかし、「外的要因による行動のコントロール」は、 = .44と低かった。

日本語版 CFC 尺度は、井上・有光（2008）の尺度構成に従い尺度得点を求め、その基本統計量を Table 3 に示した。尺度の内的整合性を確認するため Cronbach の係数を算出したところ、「未来結果熟慮」は = .70と高い値を示しその信頼性は確認された。

Table 2 日本語版 BIS-11の下位尺度得点の基本統計量と信頼性係数

因子名	平均値	標準偏差	最小値	最大値	係数
慎重な計画と思考の欠如	2.54	.50	1.00	4.00	.69
衝動的行動	2.63	.72	1.00	4.00	.82
注意・集中の欠如	2.52	.46	1.00	4.00	.70
行動前の認知の欠如	2.19	.63	1.00	4.00	.54
認知の単純さ	2.43	.85	1.00	4.00	.59

Table 3 RRS と日本語版 CFC 尺度の下位尺度得点の基本統計量

尺度名	因子名	平均値	標準偏差	最小値	最大値	係数
RRS	改良型セルフ・コントロール	3.50	.73	1.00	6.00	.75
	外的要因による行動のコントロール	3.74	.85	1.00	5.86	.44
	調整型セルフ・コントロール	3.64	.95	1.00	6.00	.78
CFC	未来結果熟慮	2.69	.43	1.56	4.00	.70

Table 4 各尺度の下位尺度間の相関係数

BIS-11	RRS			CFC
	改良型セルフ・コントロール	外的要因による行動のコントロール	調整型セルフ・コントロール	未来結果熟慮
慎重な計画と思考の欠如	-.60**	.08	-.15**	-.42**
衝動的行動	-.25**	.08	.09	-.19**
注意・集中の欠如	-.31**	.54**	-.05	-.24**
行動前の認知の欠如	-.18**	-.05	.10	-.20**
認知の単純さ	-.05	.14*	.05	-.12*

注) * $p < .05$, ** $p < .01$.

次に、日本語版 BIS-11 の 5 因子と、RRS の 3 因子、日本語版 CFC 尺度の 1 因子との各下位尺度得点間の Pearson の相関係数を算出し、Table 4 に示した。その結果、RRS の「改良型セルフ・コントロール」は、日本語版 BIS-11 の「慎重な計画と思考の欠如」($r = -.60, p < .01$)・「衝動的行動」($r = -.25, p < .01$)・「注意・集中の欠如」($r = -.31, p < .01$)と、それぞれ有意な負の相関を示した。また、日本語版 CFC 尺度の「未来結果熟慮」は、日本語版 BIS-11 の「慎重な計画と思考の欠如」($r = -.42, p < .01$)・「注意・集中の欠如」($r = -.24, p < .01$)と有意な負の相関を示した。「未来結果熟慮」と「衝動的行動」は、負の関係にあったものの相関係数は低かった。

以上のことから、日本語版 BIS-11 の 5 因子のうち信頼性が確認された「慎重な計画と思考の欠如」・「衝動的行動」・「注意・集中の欠如」において、「改良型セルフ・コントロール」および「未来結果熟慮」との負の相関が認められ、構成概念妥当性が確認された。

考察

本研究で作成した日本語版 BIS-11 の因子分析を行ったところ、5 因子が抽出され、そのうち「慎重な計画と思考の欠如」・「衝動的行動」・「注意・集中の欠如」の 3 因子は、信頼性が確認された。さらに、この 3 因子は、衝動性と逆の概念である「改良型セルフ・コントロール」および「未来結果熟慮」と有意な負の相関があったことから、構成概念妥当性が確認された。一方、「行動前の認知の欠如」・「認知の単純さ」の 2 因子は、信頼性が低く、構成概念妥当性も確認されなかった。その結果、日本語版 BIS-11 は、その信頼性・妥当性から、3 因子構造の衝動性尺度として適用できる可能性が示唆された。

本研究で使用した BIS-11 の 30 項目のうち、不良項目となった項目を見てみると、項目 11 「私は、稼いだ以上に、お金を使ったりクレジットを使って支払う」・24 「私は、住まいを変える」・25 「私は、仕事を変える」にフロアー効果が見られた。このことは、本研究の対象者が学生であったことから、親の援助のもとで生活している学生にとって、経済がからむこれらの質問内容が、学生自身の行動特性に関与していない可能性があり、不適切な項目となったと考えられる。

本研究では、因子分析で抽出された日本語版 BIS-11 の 5 因子のうち「行動前の認知の欠如」と「認知の単純さ」の 2 因子は、信頼性が低かった。しかし「行動前の認知の欠如」の項目内容は、拙速で、無計画な行動傾向を問うものであり、衝動性を反映していると考えられる。Dickman (1990) は、衝動性に関して機能的衝動性 (functional impulsivity) と非機能的衝動性 (dysfunctional impulsivity) の概念を提唱している。機能的衝動性とは、即座の行動が最適な結果が得られるような状況で深く考えずに行動する傾向であり、非機能的衝動性とは、不利な結果となる状況で即座に行動する傾向のことである。本研究で得られた第 4 因子「行動前の認知の欠如」において、最も因子負荷量が高かった項目 9 「私は、すぐに決められる」は、第 4 因子だけではなく、第 3 因子「注意・集中の欠如」にも負の因子負荷が見られた。このことから「私は、すぐに決められる」に対する回答反応が、Dickman の言う非機能的衝動性・機能的衝動性の双方に分かれたと推測される。第 4 因子の他の 2 項目、項目 10 「私は、何も考えずに物事を進める」・項目 18 「私は何も考えずにとやかく言う」は、Dickman の言う非機能的衝動性にあたると考えられる。このように、第 4 因子には異なる衝動性に関わる項目が含まれるために、信頼性の低さにつながったと考えられる。

第5因子「認知の単純さ」は項目20「私は、パズルが好きだ」・項目19「私は、複雑な問題について考えるのが好きだ」の2つの逆転項目からなり、項目数が少なかった。また、この2項目は認知の単純さを聞いているが、異なる次元の質問内容だと思われる。このことが、信頼性の低さとして現れたと考えられる。

本研究の日本語版 BIS-11は、Patton et al. (1995) の研究を基にしている。Patton et al. では、衝動性を「注意衝動性」・「運動衝動性」・「非計画的衝動性」の3因子として捉えている。本研究で得られた3因子とPatton et al. の3因子は、「慎重な計画と思考の欠如」と「非計画的衝動性」、「衝動的行動」と「運動衝動性」、「注意・集中の欠如」と「注意衝動性」がそれぞれ対応していると考えられる。しかし、各因子に含まれる質問項目は、Patton et al. が示した因子を構成する質問項目とは異なっている。このことは、日米間の文化差、また日本語表記のニュアンスによる回答者の解釈の違いが反映されたのではないだろうか。

また、Moeller et al. (2001) は、BIS-11が質問紙の形態をとっている以上、回答の精度は個人の正確さに頼らざるをえないとし、自己記入式質問紙の欠点を指摘している。それに対しCheung, Mitsis, & Halperin (2004) は、行動の抑制機能に関連する課題 (Stop Signal Reaction Time・GO NO-GO 課題など) を用い、BIS-11スコアとの関連を確認している。日本語版 BIS-11に関しても、今後は行動レベルの課題と自己記入式質問紙との関連を調べ、基準関連妥当性の検討していく必要がある。

Patton et al. (1995) の研究では、BIS-11を学生・精神疾患患者・男性受刑者を対象に実施し、学生に比べて精神疾患患者・受刑者の BIS スコアが有意に高いことを示し、衝動性尺度としての臨床的有用性を示した。そして、Moeller et al. (2001) は、BIS-11で確認された3つの因子と異なるパターンを示す衝動制御疾患との関係性を示唆している。このように、これまでの衝動性の研究は、社会的に問題行動を引き起こす衝動性として検討するものが多かった。しかし、臨床的領域だけではなく、逸脱しない領域での衝動性および衝動的行動をも広くとらえることによって、個人の日常的な適応性に迫れるのではないかと考えられる。そのためには、Dickman (1990) が機能的・非機能的衝動性を提唱したように、衝動性のポジティブな面を検討して行く必要がある。たとえば、山口・鈴木 (2007) は、衝動的行動が生起する状況をネガティブな状況とポジティブな状況とに分類し、それらの状況において生起する衝動的行動と人格特性との検討を行っている。今後は、このような衝動性の両側面を明らかにして行くことが課題となるだろう。

引用文献

- Ainslie, G. (1975). Specious reward: A behavioral theory of impulsiveness and impulse control. *Psychological Bulletin*, 82, 463-496.
- Baker, L. A., Lozano, D. I., & Raine, A. (2009). Assessing inattention and impulsivity in children during the Go/NoGo task. *British Journal of Developmental Psychology*, 27, 365-383.
- Barratt, E. S. (1959). Anxiety and impulsiveness related to psychomotor efficiency. *Perceptual and Motor Skills*, 9, 191-198.
- Barratt, E. S. (1985). Impulsiveness subtraits: Arousal and information processing. In J. T. Spence and C. E. Izard (Eds.), *Motivation Emotion and Personality*, 137-146. Elsevier Science. North Holland.
- Cheung, A. M., Mitsis, E. M., & Halperin, J. M. (2004). The Relationship of Behavioral Inhibition to Executive Functions in Young Adults. *Journal of Clinical & Experimental Neuropsychology*, 26, 393-404.
- Dickman S. J. (1990). Functional and Dysfunctional Impulsivity: Personality and Cognitive Correlates. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 95-102.
- Eysenck, H. J., & Eysenck, M. W. (1977). The place of impulsiveness in a dimensional system of personality description. *The British Journal of Social and Clinical Psychology*, 16, 57-68.
- 井上美沙・有光興記 (2008). 日本語版未来結果熟慮尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, 16, 256-258.
- Luengo, M. A., Carrillo-de-la-Peña, M. T., & Otero, J. M. (1991). The components of impulsiveness: A comparison of the I. 7 Impulsiveness Questionnaire and the Barratt Impulsiveness Scale. *Personality and Individual Differences*, 12, 657-667.

- Moeller, F. G., Barratt, E. S., Dougherty, D. M., Schmitz, J. M., & Swann, A. C. (2001). Psychiatric aspects of impulsivity. *American Journal of Psychiatry*, 158, 1783-1789.
- Patton, J. H., Stanford, M. S., & Barratt, E. S. (1995). Factor structure of the Barratt impulsiveness scale. *Journal of Clinical Psychology*, 51, 768-774.
- Rosenbaum, M. (1980). A schedule for assessing self-control behaviors; Preliminary findings. *Behavior Therapy*, 11, 109-121.
- Smith, P., Waterman, M., & Ward, N. (2006). Driving aggression in forensic and non-forensic populations: Relationships to self-reported levels of aggression, anger and impulsivity. *British Journal of Psychology*, 97, 387-403.
- Someya, T., Sakado, K., Seki, T., Kojima, M., Reist, C., Tang, E. W., & Takahashi, S. (2001). The Japanese version of the Baratt Impulsiveness Scale, 11th (BIS-11): Its reliability and validity. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 55, 111-114.
- Strathman, A., Gleicher, F., Boninger, D. S., & Edward, C. S. (1994). The consider of future consequences: Weighing immediate and distant outcomes of behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66, 742-752.
- 杉若弘子 (1995). 日常的なセルフ・コントロールの個人差評価に関する研究 心理学研究, 66, 169-175.
- Taylor, J. A. (1953). A personality scale of manifest anxiety. *The Journal of Abnormal and Social Psychology*, 48, 285-290.
- Von Diemen, L., Bassani, D. G., Fuchs, S. C., Szobot, C. M., & Pechansky, F. (2008). Impulsivity, age of first alcohol use and substance use disorders among male adolescents: a population based case-control study. *Addiction*, 103, 1198-1205.
- 山口麻衣・鈴木直人 (2007). 衝動的行動質問紙の作成と衝動的行動に影響するパーソナリティ特性との関係性の検討 感情心理学, 14, 129-139.
- Zuckerman, M., Buchsbaum, M. S., & Murphy, D. L. (1979). Sensation seeking and its biological correlates. *Psychological Bulletin*, 88, 187-214.